

研究集会

◆官営工房研究会（第8回）

1999年12月6日

官営工房研究会では、これまで内容・時代・地域の異なるさまざまなタイプの工房の実例の検討を積み重ねながら、考古学と日本史の研究者による共同研究を進めてきた。その成果は既に「官営工房研究会会報」1～6として刊行している。今回は中央の工房について、時間軸に沿って考える試みとして、寺崎保広氏（奈文研・当時、現奈良大学）に「7・8世紀の官営工房をめぐる諸問題—飛鳥池遺跡から平城京まで—」と題する報告をいただき、議論を深めた。参加者は23名である。

寺崎氏の報告は、文献史学の立場から、発掘調査の成果を総合的に捉えて古代の工房に迫ろうとするもので、時期の異なる3つの工房の遺跡が取り上げられた。1つめは、平城京右京八条一坊十三・十四坪の工房で、官営か私営かという二者択一論ではなく、政府との関わり方をもっと重視して工房の実態を検討すべきだとの指摘があった。2つめは平城京左京三条二坊の長屋王邸内の工房で、伝票木簡にみえる工人について、官あるいは貴族という特定の所属として捉えるのではなく、工人の主体性に着目し、官に拘束される期間以外に、工人が自発的に長屋王邸に勤務していたのではないかという、新しい視点が呈示された。3つめは飛鳥池遺跡の工房で、その性格については宮廷工房説や飛鳥寺工房説があるが、平城京の工房に比べて官の主体的役割が窺えるとの指摘があった。

今後も実態に即した多様な工房のあり方を検討し、官営工房研究をより実り豊かなものとしていきたい。（渡辺晃宏）

◆長屋王家木簡・二条大路木簡研究会

2000年1月29日

昨年度から始めた本研究会では、田島公（東京大学史料編纂所）・多田伊織（白鳳女子短大）・福原栄太郎（神戸山手大学）の3氏に報告をお願いした。

田島「新出木簡と科野（信濃）の古代史」は、都城と更埴市屋代遺跡群出土の木簡を用いて信濃の地域史を再検討したものである。そして長屋王家木簡中の「御馬司信濃」「播信／讃信」などの記載から、長屋王家と信濃の関わりなどを指摘し、封戸が埴科・更級両郡に存在した可能性を論じた。

多田「長屋王の池」は、第303-8次調査で検出された王邸内の池遺構との関わりで「懐風藻」に詠われた王邸の「西園」を検討し、それが「文選」等における用法に基づき、長屋王を公子の地位に比して用いられたものであり、実態として池が邸内西園にあったとは言えないとした。

そして福原栄太郎「長屋王家の消費活動」は、貨幣として布・米・銭貨が使用されているが、その中では発行後間もない銭貨が既に大きな比重を占めており、それが都での特徴であったこと、長屋王邸の景観を復原する際には、「宇津保物語」に見える種松の幸妻の家の描写が大いに有効であると報告した。参加者26名。

（館野和己）

◆遺跡地図情報システムの研究

2000年2月4日

本年度で第4回目となる研究会のテーマは「空間情報標準と遺跡GIS」である。GISの分野でも国際標準やJISの策定が進められており、この話題について日本の第一人者である国土地理院の稲葉和雄氏に講演をいただいた。遺跡GISも国際的な標準の枠内で構築されるべきものであり、標準化の動向から学ぶものは多い。続いてXMLについて、奈良先端科学技術大学院大学の羽田久一氏に発表いただいた。データを記述する際に内容に関するタグを付加していくXMLが、最も標準的な言語として普及してきており、遺跡GISもそれののった記述が求められる。これに関連して、GISに特化したXMLであるG-XMLについて、東京大学の有川正俊氏に発表いただいた。これらの普及によって情報交換が容易になろう。

近年線画による図面を補完するものとして利用が増えているオルソフォトについて、ジオネット株式会社の長谷川博幸氏から発表していただいた。写真は地図に

表現されていない情報もたくさん持っており、オルソ化することでGIS上で有効利用できる。さらに株式会社かんこうの中雅明氏からは、遺跡情報活用の事例を発表いただいた。（森本 晋）

◆古代土師器の生産と流通Ⅱ

2000年2月5～6日

第2回目の今回は「畿内産土師器の各地への展開」をサブテーマとし、可能な範囲で出土品を持ち寄り、遺物の観察及び検討を行った。また、全国の出土状況について15ブロックに分け、各地域の研究者から現状について報告を行い、理解を深めることができた。

発表題目は以下の通り（敬称略）。

奈良県出土土師器の比較検討

（金田明大・川越俊一：奈文研）

各地域における畿内産土師器の出土実態
九州（中島恒次郎：太宰府市教委）／山口・広島（大林達夫：防府市教委）／岡山（武田恭彰：総社市教委）／鳥根・鳥取（柳浦俊一：鳥根県埋文センター）／四国（片桐孝治：香川県埋文センター）／兵庫（小柴治子：姫路市教委）／和歌山（武内雅人：和歌山県教委）／滋賀・京都（畑中英二：滋賀県教委）／愛知・岐阜（横幕大祐：池田町教委）／尾野善裕：京都国立博物館）／三重（大川勝宏：齋宮歴史博物館）／北陸（北野博司：石川県埋文センター）／長野（西山克巳：長野県埋文センター）／神奈川・静岡（田尾誠敏：東海大学）／関東（中島広顕：北区教委）／松本太郎：市川市教委）／東北（木村浩二：仙台市教委）
検討の結果、従来畿内地方の生産物として無批判、一括で考えられていたものの中に、異なった特徴をもつものが多く存在することがわかった。このことから、特徴的な製作技法が在地における土師器生産に早くから影響を与え、従来の技法



と融合しながら定着していく実態の諸相が明らかになり、当該期の土師器生産を考える上で、新たな検討課題が生まれた。これらの影響下に成立した土師器の違いを、各地の土師器を実際に比較しながら検討できたことは、有意義であった。

(川越俊一)

◆保存科学研究集会

一非破壊手法による考古資料の分析・観察一

2000年2月8日

考古資料の分析や内部構造の調査は、非破壊法によることが原則である。最近、各地方自治体では保存処理施設の整備にともない、各種の非破壊測定装置が設置され、多くの成果が得られている。いっぽう、分析技術の進歩にともない新しい装置が開発され、従来では得られなかった詳細な情報を得ることが可能となってきた。さらに、コンピュータやソフトウェアの開発により、かなりの部分が自動化され、基礎的知識や経験がなくても、簡単に測定値を得ることも可能となってきた。このような現状で、測定値や解釈等に問題が生じていることも事実である。本研究集会では、最も普及している材質調査法として蛍光X線分析法・X線回折法を取り上げ、データの解釈をめぐる問題点などに重点をおいた研究発表と討論を行った。

また、レーザーラマン分光法など最新技術に関する紹介なども行った。観察技術に関しては、HiX-CT法・核磁気共鳴イメージング法・中性子ラジオグラフィに関する研究発表があった。今回は口頭発表8件に加えてポスター発表14件で、参加人数は100名を超えた。

(肥塚隆保)

◆飛鳥時代における造瓦技術の変遷と伝播 一飛鳥時代の瓦づくり(第3回)一

2000年2月26~27日

「船橋廃寺式軒丸瓦と百済大寺式軒丸瓦」をテーマとした研究集会を開き、以下のような成果を得た。

①飛鳥時代の標式軒丸瓦の一つである船橋廃寺式について、大和・河内・山背・備中・安芸・尾張などの資料を取上げ、製作技法は、前回検討したいわゆる角端点珠形式の軒丸瓦よりやや後出すること、瓦当文様は奥山廃寺ⅣA・豊浦寺Ⅲ

Dが古く、やがて中房が半球状、蓮子1+8、弁端が反り気味となり、最後は外縁が広がる変化をつかんだ。年代は630年代前後で意見がほぼ一致した。

②船橋廃寺式のなかでも新しい法輪寺例や尾張元興寺例では、段頭の四重弧文軒平瓦が伴出し、年代が640年代に入る見解も出た。

③舒明11年(639)に造営された百済大寺の可能性が高い吉備池廃寺では、丸瓦や平瓦は新技法でつくられたことが明らかになった。また、軒瓦は次の山田寺への過渡的な位置にあることを確認した。吉備池廃寺の軒丸瓦は、摂津・四天王寺、和泉・海会寺に范型が移るが、製作工人は異なることや、百済大寺式は目下のところ広く密に分布する状況ではないことなども明らかになった。

(毛利光俊彦)

◆郡衙正倉の成立と変遷

2000年3月9~10日

郡衙正倉の成立や、穀穀の取収・運用の変遷について検討することを目的とした研究集会を開催した。考古学・文献史学の研究者100人余が参加した。郡衙正倉遺跡の代表例や、那津官家に関わる那珂・有田遺跡群についての事例報告がなされるとともに、考古学サイドから郡衙正倉の変遷に関わる研究報告、文献史学の立場からはミヤケと官稲との関係、田租・出挙制の成立、平安に至る穀穀取収の変遷、に関する研究報告が行われた。討議ではまず、ミヤケの性格が議論され、ミヤケの倉と郡衙正倉とは、直接的な連続性はないとの結論が得られた。郡衙正倉の変遷については、8世紀半ばの画期が指摘されたが、評から郡への変化が正倉院にも現れているか否か、短期一斉築造と、文献史料からうかがえる段階的な増築との2つのタイプが存在する意味は何か、など新たな論点となり、穀穀蓄積過程と正倉の変遷についての議論もなされた。また、不動・動用穀と出挙類稲との区別、別置された正倉と豪族の私倉や集落内の倉庫との関係など、今後の研究視角も示された。なお、この研究集会では、参考資料として正倉関係文献史料集成・主要正倉遺構図集成を作成し、配布した。

(山中敬史)